The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「生活の芸術」を目指して ： 周作人のセクシュアリティ論
Author(s)	王, 蘭
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47166
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【1】

氏　　名	王（オウ）　蘭（ラン）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２０６０９　号
学位授与年月日	平成 18 年６月 30 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学　位　論　文　名	**「生活の芸術」を目指して－周作人のセクシュアリティ論－**
論文審査委員	（主査） 教　授　深澤　一幸 （副査） 教　授　北村　　卓　　助教授　小門　典夫

論　文　内　容　の　要　旨

本論は、近代中国の代表的な知識人である周作人（1885-1967）の性についての議論を取り上げ、彼の唱える性道徳を詳細かつ体系的に検討することを目的とする。

第一章では、まず、問題提起として、ポルノ小説を儒教経典の下に隠して読む「前代の老儒者」を皮肉る周作人の姿勢から、彼の性に対する態度が、「儒教的禁欲主義の上品さ」とも言うべき中国の文人伝統と深く断絶したものであることを指摘する。この断絶はなぜ起きたのか、彼は何のために性を語り続けたのか、どのようなことを語ったのか。本論はこのような問題意識を持ち、彼のセクシュアリティ論を考察していく。なお、本論の考察方法として、ミシェル・フーコーの『性の歴史』第二巻と第三巻に示された、古代ギリシア・ローマにおける性道徳の形成原理を読み解く、「解釈学」的な手法を取り入れている。

第二章と第三章では、「前代の老儒者」と異なる近代的な知識人である周作人の性に関する知的構成を考察する。まず、第二章では、彼の知的構成の中の西洋近代人間科学の側面を考察する。彼の性についての理論的基礎は、主として、生物学、人類学及び性科学の三つの学問から構成されている。近代日本の生物学者丘浅治郎から吸収した生物学の知識は、彼の人間理解の出発点となり、人間と動物の類似性を強調する近代生物学は、彼に人間の動物的な本能を肯定する根拠を与えた。人間道徳の合理的な基盤は生物学に求めるべきだという「生物学に基づく人生哲学」は、彼の終生にわたる最も堅持した信念である。そして、「文化の起源と発達」の基本原理を解明する人類学も、彼の人間理解に大きな影響を与えた。特に『金枝篇』において、フレーザーの提示した原始人の呪術についての学説は、性のタブーに隠された原始人の思惟原理を明らかにしたものとして、彼を大いに啓発した。人類学は、彼にとって、性を不合理な禁忌から解放する理論的武器となったのである。さらに、彼の性に関する認識を決定付けるのは、性科学である。近代イギリスの文明批評家、「性の哲人」と呼ばれるハブロック・エリスは、彼の人生観に最も深遠な影響を及ぼした。周作人は、エリスから、性に関する「最も健全な常識」と性道徳のあり方を、全面的に学んだ。また、フロイトについては、彼はあまり言及しなかったが、しかし、その文章から、エディプス・コンプレックス、幼児性欲、夢・無意識、リビドーの昇華など、精神分析の基礎的な概念を理解したことは確認できる。つまり、性について、周作人は、まず、生物学的な身体を前提に人間の基本的な自然本能として認識し、この本能的な欲望は肯定されるべきものとし、性を制限する様々な禁忌や規制を人類学の知見に依拠して否定した。この本能の生理的、文化的な様相に関しては、性科学の提供した知識によって正確な理解が得られると考えたのである。

第三章では、彼の知的構成における日本文化の側面を考察する。20 世紀の中国における最大の知日家として知られる周作人は、性に対して寛容的な態度を見せ、また、道学的な偽善を持たないことを日本文化の美点と考え、中国文化と対置させ、非常に称賛している。日本文化に対する彼の理解は、儒教道徳観を批判し、恋愛感情や色欲を肯定する江戸時代の国学者本居宣長と近代の学者津田左右吉などの思想に一脈を通じていることから、これらの日本人学者から何らかの示唆を得たと考えられる。性をめぐる日中文化の異なる態度を示す証拠として、彼は、失われた唐代の二つの性文学に注目した。一つは、中国では知られていないが、日本で読まれ続けた遊里小説『遊仙窟』であり、もう一つは、20 世紀になって敦煌の洞窟から発掘された、性愛の喜びを描写する賦文「天地陰陽交歓大楽賦」である。「天地陰陽交歓大楽賦」は、中国文学史上において完全に抹消されていたが、それに影響されて書かれたと思われる「男女婚姻賦」は、日本では、『本朝文粋』のような後世に大きな影響を残した文章典範の文集に収められ、今日まで伝えられてきた。性文学に対して、中国文化と鮮明な対照をなしていた日本文化を、「これは日本人とその文章が人情味のあるところ」と、彼は強く肯定している。このため、彼は日本文学におけるいわゆる「色好み」の系譜をとりわけ重視し、生涯にわたって愛好した。本章では、彼の愛好した日本文学から、二つの代表的な作品をとりあげる。一つは博識な知識人兼好法師の『徒然草』であり、もう一つは江戸庶民の川柳集『末摘花』である。彼は、兼好法師を最も好きな日本人であると表明し、また、『徒然草』から十四段を選び翻訳した。中の性に関する内容の四段から、僧侶の身でありながらも「好色」を否定しない兼好の態度が見られる。周作人が兼好を好む理由は、厳しい性道徳を説く中国の道学者と対照的なこうした態度にあると思われる。また、彼は、『末摘花』という、日本の艶笑文学の代表格であり、性についての句を集めた古川柳集から極めて大きな影響を受けたと、自ら語っている。『末摘花』に対する興味は、恐らくその中に見られる、性と笑いとの見事な融合にあるだろう。これらの口語詩は、彼に、儒教禁欲主義に重く覆われた中国文化とは最も異質な性文化をもつ江戸庶民の性意識の健全さを見せた、と思われる。つまり、周作人の最も重視した日本文化の側面とは、「情」である。彼の理解した日本文化の特質としての「情」とは、性のことを、「罪」や「醜悪」といったような観念から遠く離れて、「自然」として受け止める態度である。

本論では、第二章と第三章の考察によって、周作人の性に対する態度を決定付けた、西洋からの「知」と日本からの「情」の受容状況を明らかにした。性をめぐる彼の態度が、伝統的な中国知識人と深い断絶を見せるのは、こうした知的構成によるものである、と思われる。

第四章では、性について、彼がどんなことを語ったのかを明確に示すために、その雑多な議論から三つのテーマを抽出して考察する。この三つのテーマとは、自己との関係、他者（女性）との関係、猥褻表現、という三つの問題系である。

自己との関係、つまり自己認識という次元における性の意味づけの問題であるが、ここに性科学の受容が最も鮮明にあらわれている。彼は、性を自己認識の中核にすえ、性を通して自己を知るべし、という性科学的な人間認識の思考様式を内面化している。これを示したのは、森鴎外の小説「キタ・セクスアリス」の紹介文と翻訳である。さらに彼自身の「性的生活」を回想するエッセー「初恋」にも、性科学的な視線をもって、自らの「性的概念」の覚醒を省察する姿勢がみられる。

他者との関係とは、即ち、周作人の女性論への考察である。近代中国の男性知識人の中で最も名高いフェミニストとして知られる周作人は、女性とはどういう存在であるか、女性とどのような関係を築くべきか、といったテーマを、性道徳の領域における男性自身の課題とし、終生模索し続け、一つの道徳の形を提示しようとした。彼の女性に対する認識は、女性を生身の人間として把握し、男性と同じように性的欲望を持つ存在として考える性科学に依拠している。同時に、彼はまた、女性の身体的な脆弱さと抑圧されてきた歴史的な地位の低さから、女性を男性の助けを必要とする弱者的な存在として理解している。そのため、女性との関係において、彼が強調したのは、男女の対等的な関係よりも、女性の弱さや苦しみを思いやる、「婦人を哀れむ」ような「君子聖人」的な救済の姿勢である。そして、男女の性的な関係について、彼は、妻妾制より女性に平等的な近代の一夫一婦制を理想的な婚姻制度であると考えた。一夫一婦制を、忠実貞節な理想的な形に作り上げるために、彼は以下三つの実践法を提示した。⑴夫婦相互の貞操義務、⑵「愛の創作」という双方の不断の努力による夫婦関係の更新と維持、⑶女性の性的満足を尊重する夫婦性生活。

本章における三つ目のテーマは、猥褻表現の問題系である。周作人は、文学表現上の価値、笑いを刺激する効用、現存する道徳規範に対する抵抗、という三つの視点から、猥褻表現の意味と価値を擁護した。

最終章の第五章は、周作人の唱える性道徳の目指す目標としての「生活の芸術」論についての考察である。1924年、彼は「生活の芸術」という有名なエッセーを発表し、中国文明の再建という広大な目標のために構想された一種の文明論ともいうべきこの文章で、中国の禁欲思想を批判し、自由と節制によってもたらされる調和のとれた生活様式を唱えている。彼の唱える自由と節制とは、主として性道徳をめぐる思索として理解すべきである。自由と節制、つまり性の自由を獲得した上に自ら節制を行う、これは彼の性道徳の中心理念である。彼は、性を自然本性として肯定し、厳しい性道徳を斥けた。しかし、彼はまた単純な「性の解放」論者ではなく、むしろ節制を唱えたのである。節制が必要とされるのは、他者への配慮と真の快楽の追求という二つの目的のためである。つまり、節制とは、妻との関係を理想的な形に作り上げるための努力でありながら、同時に、「歓楽の程度を増す」、真の快楽を得る手段でもあり、自己への配慮でもある。従って、自己放棄とは異なる。外部による禁制に対する服従ではなく、自己の内面的な欲求によるこの自発的な節制こそ、抑圧と放恣しかない中国にとって、最も切実に必要な「新しい自由と新しい節制」である、と彼は強く訴えた。彼の唱える「生活の芸術」とは、節制によって到達する、禁欲と縦欲との調和である。

論文の最後では、晩年のフーコーが、古代ギリシア人の性道徳への考察から見出した「生存の美学」と周作人の「生活の芸術」に共通する、性道徳における節制の美学原理の持つ今日的な意味を考える。フーコーは、宗教や法律への従属という考え方が消滅しつつあり、或は既に消滅してしまった、いわゆる道徳不在の今日社会に、新しい道徳の基盤として、個人の人生を一個の芸術作品としてとらえる、古代ギリシア人の「生存の美学」を提示しようとしたのであるが、近代中国の知識人によって唱えられた、自由と節制、他者への配慮と自己の快楽との調和の取れた美を目指す「生活の芸術」も、今日の我々に一つの啓示を与えている、と筆者は信じる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、近代中国の代表的知識人である周作人（1885－1967）の性についての議論を取り上げ、かれの唱える性道徳を詳細かつ体系的に検討したものである。まずかれの性についての認識の基礎を生物学・人類学・性科学から分析し、そして性の問題をめぐる自己との関係・他者との関係・猥褻表現という３つのテーマを具体的に考察し、最後にかれの唱える「生活の芸術」論を読み解いている。

本論文の全体として特筆すべき点は、論旨の展開がきわめて丁寧になされており、それゆえに読み進むのがきわめて容易ということである。それを可能にしているのは、先行研究に対する著者の周到な目配りであり、また主にフーコーの著作などに現れる最新の研究成果に対する著者の確かな鋭敏な判断である。それは、周作人の性道徳論は、西洋近代の性科学から影響を受けたにもかかわらず、フーコーの批判した西洋近代のセクシュアリティの様相とは異なり、「セクシュアリティの近代」という枠組みの中に収斂させることが出来ない、といった記述などに明らかである。

また内容のうえで特に評価すべきは、第３章「日本文化による影響」の記述である。周作人とほぼ同時代の津田左右吉の「日中文化異質論」から説き起こし、江戸時代の本居宣長へと溯り、そのいわゆる国学思想が周の日本文化理解に影響をあたえ、ひいては周の「徒然草」色欲論や性に関する川柳のみをあつめた句集「末摘花」への愛着をもたらしたとする著者の解釈は、日本はもちろんのこと、中国大陸にも先行研究はなく、まさに著者が独自に発見したものであり、周作人研究、とくにその性道徳の研究において、今後はかならず参照すべきものといえよう。

ただわずかな不足をいえば、結論となるべき第５章の記述、つまり周作人の「生活の芸術」とフーコーの「生存の美学」との共通と差異を、二人に共通する古代ギリシアの性道徳への共感と考察から展開しようとした部分がやや舌足らずに終わったのは惜しまれる。しかし、これは本論文全体の価値をいささかも損なうものではない。

以上のように、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分価値あるものと認められる。